

大力物語

菊池寛

青空文庫

昔、朝ちやうてい廷ていでは毎年七月に相撲すもうの節会せちえが催もよおされた。日本全国から、代表的な力士を召めされた。昔の角力すもうは、打けつ蹴ける投げるといったように、ほとんど格闘かくとうに近い乱暴なものであった。武内宿彌たけのうちすくねと当麻たいまのくえはやとの勝負に近いものだ。

だから、国々から選ばれる力士も、その国で無双むそうの強つわもの者ものだったのである。

ある時、越前えちぜんの佐伯氏さえきのうじなが長ながが、その国の選手として相撲の節会に召よされることになった。途中近江おうみの国高島郡石橋を通っていると、川の水を汲くんだ桶おけを頭にいただいて帰かつてくる女がいた。

田舎いなかに珍めづらしい色白の美人である。氏長は、心がうごいて馬から降りると、その女が桶をささえている左の手をとった。すると、女はニツコリ笑わらって、それを嫌いやがりもしないので、いよいよ情を覚えてその手をしつかとにぎると、女は左の手をはずして、右の手で桶をささえると、左の手で氏長の手をわきにはさんだ。氏長はいよいよ悦えつに入いって、いっしょに歩いたが、しばらくして手を一度ぬこうとしたが、放はなさない。

越前一の強力といわれる氏長が力をこめて抜ぬこうとしても抜けないのである。氏長は、おめおめとこの女について行く外はなかった。家に着くと、女は水桶をおろしてきて氏長の手をはずして、笑いながら、「どうしてこんな事をなさるのです。あなたは一体この方ですか」という、近く寄つて見ると、いよいよ美しい。

「いや、自分は越前の者であるが、今度相撲の節会で召されて参るものである」というと、女はうなずいて「それは危いことである。王城の地はひろいからどんな大力の人がいるかもしれない。あなたも、至極の甲斐かい性しょうなしと云うわけではないが、そんな大事の場所へ行ける器量ではない。こうしてお目にかかるのも、御縁ごえんだからもし時間がゆるせば、私の家に三七日逗留とうりゆうしたらどうか。その間に、あなたをきたえて上げましょう」と、いうた。

三七日とは、三七二十一日である。その位の日数は、余裕よゆうはあつたので、氏長はこの家に逗留することにした。

ところがこの女の鍛錬法たねれんほうというのが甚だおかしはなはい。その晩から、強飯こわめしをたくさん作って喰たべさした。女みずからにぎりめしにして喰たべさしたが、かたくて初はどうしても噛かみ割ることが出来なかつた。初の七日は、どうしても喰たいわることが出来なかつた。中の七日は、ようよう喰たいわることが出来たが、最後の七日には見事に喰たい割ることが出来る。すると、女はさあ都へいらつしやい、こうなればあなたも相当なことは出来るだろうといつて、都へ立たした。この二人が情交をむすんだか、どうかはくわしく書かれていない。この女は、高島の大井子という大力女である。田などもたくさん持つて、自分で作つていた。

ある年、水争いがあつて村人達が、大井子の田に水をよこさないようにした。すると大井子は夜にまぎれて表のひろさ六、七尺もある大石を、水口によこさまに置いて、水を自分の田に流れ込こむようにした。翌日になると、村人が驚おどろいたが、その石を動かすには百人ばかりの人数が必要である。その上、そんな多人数を入れたのでは、田が滅茶滅茶めちやめちやに踏ふみ荒あされてしまう。それで、村人が相談して大井子の所へ行つて謝つた。

今後は思おぼしめし召まに叶かなうべきほど水をお使い下さい。その代りに、どうかあの石だけは、とりのけて頂きますといった。すると、大井子は夜の間にその石を引きのけてしまった。

その後、水論はなくなってしまうたが、この石は大井子の水口石みなぐちいしといって、後代まで残っていた。この事件で、大井子の大力が初めて知れたのである。

ところが、近江の国にはもう一人大井子などよりもつと有名な大力の女がいた。それは近江のお兼かねである。この女のことは江戸時代に芝居しばいの所作事しよさごとなどにも出ているし、絵草子にも描えがかれている。

この女は、琵琶湖びわこに沿うたかいづの浦うらの遊女である。彼女は、ひさしくある法師の妻となっていた。妻とはいっても、遊女で妻もおかしいから、今でいえば妾めかけである。

三

ところが、この法師が浮気者うわきものであったと見え、近頃ちかごろは同じ遊女仲間の一人に、心をうつして、しげしげ通っているという噂うわさが、お兼の耳に伝わって来た。お兼は、安からず思っていた。ある晩、ひさしぶりに法師がやって来た。いっしょに物語りしている間、お兼は何もいわなかった。いよいよ床とこに入ってから、お兼はその弱腰よわごしを両足でぐつとはさんだ。法師は、初めたわむれだと思つて「はなせはなせ」といったが、お兼はいよいよ力

をいれたので、法師は真赤になってこらえていたが、やがて蒼白そうはくになってしまった。すると、お兼は「おのれ、法師め、人を馬鹿ばかにして、相手もあろうに同じ遊女仲間の女に手出しをする。少し思い知らしてやるのだ」といつて、一しめしめたところ、法師は泡あわを吹いて気絶した。それで、やつと足はずしたが、法師はくたくたとなったので、水を吹っかけなどして、やつと蘇生そせいさせた。

その頃、東国から大番（京都守衛の役）のために上京する武士達が、日高い頃に、かいづとまに泊った。そして、乗って来た馬どもの脚あしを、湖水で冷していた。すると、その中のかんの強い馬が一頭物に驚いたと見え、口取の男をふり切つて、走り出した。

たくさんの男が、跡あとを追いかけたがどうにも手におえない。中には、引きづなに取りすがる者もいたが皆みな引き放されてしまう。ちようど、そこへお兼が通りかかった。彼女は高いあしだをはいていたが、傍かたわらをかけ通ろうとする馬の引きづなのはずれを、あしだでむずとふまえた。すると馬が勢いきおいをそがれてそのまま止まった。人々はそれを見てあれよあれよと目をおどろかした。

さすがにあしだは砂地に、足首のところまで、埋うまっていた。これ以来、お兼の大力が世間に知られたのである。常に、五、六人位の男が集まっても、私を自由に出来ませんよ、

といった。五つの指ごとに、弓を一張ずつはらせたことがある。弓は、二人張三人張などいうから、指一本でもたいした力である。

四

昔、美濃^{みののくに}国、小川の市^{いち}に力強き女があつた。身体^{からだ}も人並はずれて大きく百人力といわれていた。仇名^{あだな}を美濃狐^{みのぎつね}といつた。四代目の先祖が、狐と結婚したと云^いうことであつた。狐と大力とは別に関係はないわけだが、狐の兇^{きようあく}悪^{あく}な性質を受けたと見え、現在の闇^{やみ}市の親分^ちのように、商人をいじめては、いろいろな品物を奪^{うば}い^うつていた。ところが、同じ時に尾張^{おわりのくに}国片輪^{かたわ}の里に力強き女がいた。この女は、きわめて小柄^{こがら}の女であつた。大力の聞え高い元興寺の道場法師の孫に当つていた。この尾張の女が、美濃狐のことを聞いて、一度試してやろうと云うので、蛤^{はまぐり}と熊^{くま}葛^{まつづら}で作つたねり皮とを船に積んで、小川の市へやつて来た。こういう他国者の新顔を、痛めつけることは昔も今も暴力団的顔役の仕事である。美濃狐は、早速尾張の女の船へ行つて、蛤を差し押えて、「お前は、一体、どこの者だ。誰にことわつてここで商売をするのか」といった。尾張の女は、だまつていた

が、四度目に（どこから来たか大きなお世話だ）と、返事した。すると、美濃狐が怒つて、尾張の女を打とうと手を出すと、尾張の女はその手を捕えて、熊葛のねり皮で打った。すると、あまりに力が強いので、そのねり皮に肉がくつついて来た。返すがえす打つと、その度に肉がついた。さすがの美濃狐も、音を上げて謝った。すると、尾張の女は、以後商人達を悩ますなど、いましめてから許してやった。その後美濃狐は、小川の市に来なくなつたので、市人達は皆欣喜合つて、平かな交易がつづいた。

この尾張の女は、そうした大力にも似合わず、その姿形は、ねり糸のようにしなやかであつた。そして、その郡の大領（郡長）の奥さんであつた。あるとき、主人の郡長のために、麻の布を織つて、それを着物に仕立てて着せた。それは現在の上布のようなものでしなやかで、すこぶる品のよい着物であつた。ところがこの郡長がそれを着て、国司の庁へ行くと、国司が、それを見て、ほしくなつたと見え、「その着物をわしによこせ。お前が着るのにはもつたいない」と、云つて取り上げたまま返さない。

五

郡長が家に帰ると、今朝着せてやった着物を着ていない。妻である尾張の女がそのわけを訊ねると国司にまき上げられたと云う。妻は、あなたはあの着物を心から惜しいと思うかと訊いた。すると、良人は極めて惜しいと思うと答えた。すると、尾張の女は翌日国府へ出かけて行つて、国司に面会を求めて返してくれと云つた。すると国司は、うるさがつて、この女を追い出せと、役人達に云いつけた。多勢の役人が、寄つてたかつて連れ出そうとするが、ビクとも動かない。たちまち、役人を振りはらつて国司に近づくと、片手で国司を引き倒すと、そのまま引きずつて、国府の門外へ連れ出した。国司は、青くなつて、「返す返す」と、悲鳴を揚げた。この女は、呉竹をねり糸のように、くしゃくしゃにする位強かつた。ところがこうした強い女も、封建的な家庭制度には敵わない。良人の父母が云うには、国司を手ごめにした女を妻にしているは、お前はこの先、芽の出るわけはない。私達にも、どんなめいわくが、かかるかもしれない、早速離縁すべきだと。それで主人の郡長は、元々意気地なしだつたと見え、父母の教に従つて、たちまち妻を離縁した。

尾張の女は仕方なく、故郷へ歸つて住んでいた。ある時、故郷を流れている川の南辺へ行つて、洗濯をしていると、折から荷物を積んだ船が通りかかった。船の人々がこの女をからかつた。あまり、しつこいので、「女だと思つて馬鹿にすると、頬つぺたをなぐる

ぞ」と、いった。すると、船の人々は手んでに物を、女に投げつけた。

すると、女は怒つて、川の中へはいると、舳へさきをぐつと水の中へ押し入れた。荷物が水びたしになった。船の連中は、人を雇やとつて荷物を陸にあげ、水をかい乾ほして、荷物を積んで、動き出そうとしてまた、女の悪口をいった。女は再び怒ると、今度はその船に手をかけて、人も荷物ものせたままグングン陸の上へ引きあげ、一町ばかり引きずつて行つた。船の連中は、青くなつて、ひたあやまりにあやまつた。女はやつと、機嫌きげんをなおして、また船を川まで、引きずりもどしてやつた。

六

もう一人の女大方は、相撲すもう人、大井光遠の妹である。光遠は、横ぶとりの力強く足早すみき角力であつた。妹は、形有ありさま様尋じんじよう常で美しい女であつた。光遠とは、少し離れた家に住んでいた。ある日、村人が光遠の所へ馳かけ付けて来て（たいへんです、妹さんが、盗ぬ人すびとに人質にとられました）と云つた。光遠は、それをきいたが、少しも驚かず（音ひやうしにきく昔の薩摩さつまの氏家なら妹を質にとられようが）と、すましている。村人は、拍子ひやうしぬけが

して、妹の家の方へ引き返して来た。先刻、盗人は村人達に追われて逃げ損い、光遠の妹の家に走り込んで、（この女房を人質に取った。寄り近づく者あらば、この女房をさし殺すぞ）と、村人達に宣言したのである。それでその中の一人が、あわてて兄さんの家へ知らせに行つたのであつた。

兄が相手にしないので、その村人は一体どんな容子かと家の中をのぞいて見た。すると、盗人は光遠の妹を背後から両足で抱いて、その胸に逆手に持った短刀をさしあてている。光遠の妹は、^{はずか}恥しいと見えて、^{そで}袖で顔をかくしているが、だんだん退屈して来たと見え板の間に荒づくりの矢竹が二、三十ちらばつてるのをいじつていたが、それを板の間におしつけると一本ずつわらをにじるように、にじりつぶしている。のぞいていた村人が、びつくりしたが、盗人もそれに気が付いたと見え、顔色が急に青ざめたと見ると、たちまち人質を放して逃げ出した。いったん怖気づいただけに、たちまち村人に捕えられてしまった。その男を村人達は、光遠の家へ連れて行つて殺しましようかと云うと、光遠は笑つて（もし妹がその男の太刀を持つ手を逆にねじあげたら、その男の肩の骨はたちまち砕けたくたらう。危い目に逢つていたのは、妹でなくてその男だったのだ。殺すわけではないではないか）と、云つて逃がしてやった。そして、言葉をつづけた。（妹は、わしより二倍は強い。男

に生れたら、日本中に相手はないのだが……)と、嘆息した。

七

女大力物語のついでに、男の方も二、三人書いておく。叡山の西塔に実因僧都という人がいたが、この人が無類の大力であった。ある日、宮中の御加持に行つて、夜更けて退出すると、何かの手違いで、供の者が一人もいない。仕方なく衛門の陣を出ようとする、軽装した男が一人寄つて来て(お供がいないのですか。私が負つて差しあげましょう)と云う。それはありがたいと、云つて負われると、大宮二条の辻まで行つて、(ここで降りてくれ)と云う。僧都が(いや、わしの行く先は、ここではない)と、云うと、その男が声を荒らげて(命は惜しくないのか。その衣を脱いで、どこへでも勝手に行け)と、いった。すると、僧都は負われながら脚でその男の腰をぐつとしめつけた。まるで、腰が切れそうである。男は、びっくりして(失礼な事を申しました。お望みのところへ参ります)と、云つた。すると、僧都は(宴の松原へ行つて月見をしたい)という、男はそこまで負つて行つた。そして、どうぞ降りて下さいといったが、下りようとしな。ゆうゆうと

月にうそぶいてから（右近うこんの馬場が恋しくなった。あすこへ行け）と、いうと、男は（そんなには、参れませんか。もう、御かんべんを）と云うと、僧都はまた脚をぐつとしめつけた。すると男は（参ります。参ります）と悲鳴をあげたので、僧都は脚をゆるめた。男は仕方なく、右近の馬場へ行つた。そこで、歌など口ずさんでから、今度は喜辻の馬場へ歩けといった。そして、僧都の宿所まで負われて来たときはもう暁あかつき近くで、男はへたへたになつていた。僧都は男の背中から下りてから、その男に衣をぬいでやつたが、男は地面にうずくまつたまま、しばらくの間は起き上れそうにもなかつた。

もう一人もやはり僧そうりよ侶よで、広沢ひろさわの寛朝かんちよう僧正そうじようという人である。大僧正になつた人で、仏教の方でも有名であり、宇多天皇の皇子の式部しきぶ卿きやうの宮の御子みこである。この人は、広沢に住んでいたが、同時に仁和寺にんなじの別当をも兼ねていた。別当というのは、檢非違使けびいしの長官をも云うのだが、神社仏寺の事務総長をも云うのである。ある時仁和寺が修理工事を始めていた頃の話である。

ある夕方、寛朝僧正は、もう工事がどの位進んだか見たくなくて、一人で高足たかあしだ駄だをはき、杖つえをついて、工事の現場を視察していた。現場には、足場のために、高いやぐらが組んである。その柱をくぐりながら見ていると、烏帽子えぼしを引き垂れて着た男が、つかつかと

寄つて、僧正の前に立つた。見ると半ばかくすようにはあるが、刀をぬいて、それを逆手に持っている。

僧正、これを見て（何の用ぞ）ときくと、男は片膝かたひざをついて、（自分は御存じないものである。あまりに寒さに堪たえないので、お召めしになつてゐる衣物を一つ二つ賜たまりたいのである）と、云つたが、今にも飛びかかりそうである。

僧正は（それはわけもないことだが、なぜ素直に頼まないのか。そのやり方が怪けしからぬではないか）と、いうと、横に立ち廻つたかと思うと、男の尻しりをハタと蹴けつた。すると、男はたちまち姿が見えなくなつた。僧正はおかしいと思ひながら周囲を見たが、どこにもいない。それで、庫裡くりの方へ行つて、人を呼んだ。法師達が出て来ると、（今、わたしを剥はごうとする者がいたのだが、急に見えなくなつた。灯をともしてさがしてくれ）と、云いつけた。十人ばかりの僧が、手に手に灯を持ってさがしまわつていたが、そのうちの一人が上をさして（やあ、あすこにいる）と云うので皆が見上げると、一人の黒い装しょうぞ束くをした男が、足場のために作つたやぐらの柱と柱の間に、はさまれて身動きが出来ずに、むくむく動いてゐるのであつた。二、三人昇つて見るとさすがに、刀だけは持つていたが、ぼんやりした顔をして、目ばかりパチパチさしていた。僧正のところへ連れて来る

と、僧正は（老法師とても馬鹿にしてはいけないぞ。また、わるいことは今後やらない方がいい）と云って着ていた衣の綿の厚いのを脱いでその男へ与えた。

これらの大力物語のいずれも誇張こちように違いないが、その誇張が空とぼけていて、ほほえましいものである。この話なども、蹴られて、積んであつた材木の上につかっていた程度であろうが、それを話しているうちに、だんだんやぐらの上のせてしまったのである。

青空文庫情報

底本：「おかしな話へちくま文学の森」筑摩書房

1988（昭和63）年4月29日第1刷発行

1989（平成元）年2月10日第5刷

底本の親本：「筑摩現代文学大系」巻「筑摩書房

1977（昭和52）年

初出：「新大阪新聞」

1947（昭和22）年

入力：内田いつみ

校正：小林繁雄

2009年8月7日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

大力物語

菊池寛

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>